

「青山学院大学聖歌隊」の活動

森島 豊、伊藤 悟（聖歌隊チャプレン）

本学聖歌隊活動のはじまり

青山学院大学聖歌隊は宗教センター所属のもっとも古い学生団体である。大学聖歌隊が正式に発足したのは1967年のことである。但しそれ以前から、夜間部の第二部聖歌隊が活動を行っており、当時、大学礼拝や式典で奉仕していたのは、第一部は宗教音楽合唱団オラトリオ・ソサイエティー（指揮者奥田耕天教授）、第二部は宗教委員会直属の大学第二部聖歌隊（指揮者鈴木惇弘、国立音大副手・当時）であった。大学礼拝奉仕のための聖歌隊が神学科学生によって結成される動きもあったが、一方、1964年の学院創立90周年を機に、学院のキリスト教信仰にもとづく教育方針が制定され（1964年）、学院宗教センターの設立（1966年）、ウェスレーホールの建設（1968年）、諸規則の整備が急速に進んだことにより、学内のキリスト教活動は非常に活発化した。その背景を受けて1967年、既存の大学第二部聖歌隊とならんで、大学聖歌隊（第一部）が新しく組織されることになり、大学チャペルコワイヤーとしての活動を始めた。指導は、奥田耕天教授、チャプレンは第一部新見宏宗教主任、第二部関田寛雄宗教主任であった。この年度の隊員数は、第一部40名、第二部42名だった。

1965年に世田谷キャンパスが開学し、世田谷キャンパスにて「讃美歌を歌う会」が開始された。1966年度には青山キャンパスにおいてもウェスレーホール企画として、学生と教職員対象の「讃美歌を歌う会」第一部（昼間部）・第二部（夜間部）が開始された。不定期開催で始まったが、のちに週一回のペースで教職員や学生の参加を得て実施された。この会から多くの学生が大学聖歌隊に参加したのである。指導に当たったのは鈴木惇弘であった。

1969年度には大学第一部・第二部聖歌隊ともに、通常の礼拝、特別礼拝、式典等で聖歌奉仕を行うようになっていた。学生紛争が起こった時期には、大学礼拝も不定期開催となったが、可能な範囲で聖歌隊の練習は続けられ、礼拝奉唱も行われた。定期練習のほか、合宿により隊員相互の関係の強化や技術の向上がはかられた。1969年の合宿は、前期は第一部・第二部合同（第二部が中心となり第一部が合同するかたち）で、大学八ヶ岳寮にて三泊四日で行われている。後期は3月に、第一部は八王子青年の家で、第二部は八王子セミナーハウスで、それぞれ二泊三日の合宿を行っている。この年の隊員数は、第一部23名、第二部35名であった。

その後も第二部の完全閉鎖（経済・経営2017年、英米文2019年）を迎えるときまで、青山学院大学聖歌隊と青山学院大学第二部聖歌隊という二つの聖歌隊（1965～1982年までは理工学部聖歌隊をあわせて三つの聖歌隊）が活動を続けた。1982年には厚木キャンパス開学によって、世田谷キャンパスでの聖歌隊活動の維持は次第に困難になったが、第一部聖歌隊としては活性化し、水曜日と土曜日には、青山、厚木いずれかのキャンパスで練習が続けられ、規模も質も優れた聖歌隊として成長を遂げていった。

聖歌隊企画のコンサート

1970年11月27日、はじめて第一部、第二部聖歌隊が合同でコンサートを開催した。会場は学院本部礼拝堂。演奏されたのは、シューベルトのミサ曲「ト長調」、指揮は鈴木惇弘、伴奏は花岡恭子であった。このときは、年数回開催されたウェスレーホール・コンサートの一回として行われたが、その後も毎年11月に演奏会を行うようになり、1977年にはAGUチャペルコンサートと称して本部礼拝堂で開催された。このときの聖歌隊員数は男11名、女12名であった。1985年からは、青山学院講堂で「青山学院大学聖歌隊コンサート」として開催され、のちにこれを「定期演奏会」と呼ぶようになった。ちなみに、プロの管弦楽やソリストなどゲストとの共演は、1970年の最初のコンサートのときから行われている。

1982年には、大学聖歌隊による音楽礼拝、青山祭記念聖歌隊コンサート、世田谷祭チャペルコンサートが行われている。同年6月14日には、ルイジアナ州センテナリー大学聖歌隊とオール青山合唱団（グリーハーモニー合唱団、オラトリオソサエティー合唱団、短大オラトリオソサエティー合唱団、大学聖歌隊）の合同演奏会が青山学院講堂にて盛大に開催された。

聖歌隊独自のクリスマスコンサートが最初に行われたのは、1995年12月13日である。このときはチャリティ・コンサートとして開催されている。その後、「青山学院大学聖歌隊クリスマス・チャペルコンサート」に改称、2011～2023年度は「青山学院大学聖歌隊クリスマス奉唱会～9つの朗読とキャロルの祭典」、2024年度は「青山学院大学聖歌隊クリスマス奉唱会」として実施され、これらを通して、学内外で多くの本学聖歌隊ファンを獲得することになった。

2020年3月以降、新型コロナ・ウィルスの影響による活動の制限は音楽団体にとって致命的であった。集まること、歌うことが禁じられた。オンラインによるヴォイストレーニングも検討されたが、隊員たちは自宅にいても発声して配信できる場所が限られているなど、実際の運用は困難であった。2020年後期にはかなりの制約下で活動（練習）を再開したが、聴衆を集めてのコンサート開催は許されず、クリスマス期には換気や互いの距離に配慮しながら、「9つの朗読とキャロルの祭典」を2か月半かけて収録してYouTube配信した。その状況は2021年も続き、YouTubeのアクセス数はそれぞれ数千回にも上った。その効果から、演奏の動画作成・配信をしばらく精力的に

行うこととした。J. S. Bach《Magnificat (マニフィカト)》BWV 243、G. Fauré《Requiem》& J. Brunning《Pie Jesu》、《An Easter Celebration ～ イースターの祝祭》、受難日に寄せて G. B. Pergolesi《Stabat Mater (スターバト・マートル)》より《Quando corpus morietur (肉身は死して朽つるとも)》、音楽と聖書朗読で綴る聖徒の日の祈り－G. Fauré《Requiem (レクイエム)》Op.48 &《Cantique de Jean Racine (ジャン・ラシーヌの賛歌)》Op.11ほか、オンライン上で今なおリリースされ好評を得ている。

2012年には青山祭期間中にハンドベル・クワイアとの合同コンサート、2014年10月4日には演奏会「夕べの祈りの音楽」、2022年6月25日、11月8日には「チャリティ・コンサート～ウクライナ戦禍を覚えて～」を開催している。

演奏会では讃美歌はもちろんのこと、グレゴリオ聖歌、ヴィヴァルディ、ヘンデル、モーツァルト、バッハ、メンデルスゾーン、ブラームスなど、千年以上に及ぶ西洋音楽の歴史のなかで賛美されてきた宗教音楽の名作が次々と取り入れられて演奏会活動が続けられてきた。

演奏旅行

1983年、「米国親善演奏旅行」が夏期休暇中17日間にわたって隊員15名、指導陣5名の参加で行われ、米国各地の諸教会にて演奏会を開催した。以来、毎年演奏旅行が行われるようになる。これまでに訪問した地域は次の通りである。

1983年米国、1984年北海道、1985年実施せず、1986年九州、1987年仙台、1988年実施せず、1989年北海道、1990年瀬戸内、1991年青森岩手、1992年関西、1993年伊豆大島、1994年東海、1995年仙台・山形、1996年九州、1997年新潟・群馬、1998年静岡、1999年兵庫・大阪、2000年九州、2001年北海道、2002年神戸・京都、2003年香川・愛媛、2004年熊本・鹿児島、2005年仙台、2006年北海道、2007年沖縄、2008年新潟・三条、2009年八丈島、2010年仙台、2011年名古屋、2012年松山、2013年群馬富岡、2014年オックスフォード、ケンブリッジ、2014年仙台、2015年福岡、2016年京都、2017年福島会津若松、2018年北海道、2019年金沢、2020年岡山を予定していたが新型コロナの影響により中止、2021年実施せず、2022年実施せず、2023年長崎、2024年仙台。

二度目の海外遠征は2014年3月であった。2012年10月の英国アダム・ロバーツ卿の名誉博士号授与式にて奉唱したことをきっかけとして、英国演奏旅行の企画が持ち上がり、英国ケンブリッジ大学、オックスフォード大学での演奏会開催が実現した。英国演奏旅行参加者は、隊員29名、那須輝彦教授（指揮者）、飯靖子（オルガニスト）、高砂民宣（チャプレン）ほか総勢34名であった。英国演奏旅行の実現に向けて、隊員らは、地域教会などでミニコンサートを頻繁に開催してその都度支援（カンパ）を募るなど、演奏旅行のための資金集めを精力的に行った。この英国演奏旅行の演奏曲目は、のちにCD『珠玉の宗教曲』に収められた。

聖歌隊指導者

歴代の指導者は、奥田耕天（1967～73年）、鈴木惇弘（196？～74年、第二部）、唐津東流（1975～81年）、渡辺東吾（1975～81年）、渡辺善忠（1981～89年、第二部）、飯靖子（第二部）、藤本敬三（1980年～2010年）、那須輝彦（2011～2023年）、ステイーヴン・モーガン（2016年）、青木洋也（2024年～現在）である。オルガニストは、横山正子、山田光子、樋口一枝、作井清雅子、山本由香子、西村浩子、今井奈緒子、松田晶子（1985～90年）、鷺晶子（1991～92年）、森淳子（1993～98年）、飯靖子（1989～2002年）、羽柴真樹（2003～2004年）、身崎真理子（2005～2022年）、清水奏花（2023年～現在）らが務めてきた。2012～2023年度は名倉亜矢子がヴォイストレーナーとして、2024年度からは本学聖歌隊出身の小林恵が副指導者として、それぞれ聖歌隊活動や演奏会をサポートしている。

CDリリース

水野源三の詩による讃美歌集『こんな美しい朝に』（1991年）

合唱讃美歌選集Ⅰ『牧主わが主よ』（1993年）

合唱讃美歌選集Ⅱ『神はわが力』（1996年）

『イエスはうまれた』（2001年）

『主は共にあり』合唱現代聖歌曲集（2007年）

『珠玉の宗教曲集～青山学院大学の四季～』（2015年）

現在の聖歌隊活動

現在のおもな活動の場は、日々の大学礼拝での奉仕、学院や大学の各種式典における賛美・奉唱、地域教会での奉仕やミニコンサートの実施のほか、聖歌隊の独自企画による定期演奏会とクリスマスコンサートが毎年開催されている。さらに長期休暇期間を利用して全国各地に演奏旅行に出掛け、教会、学校、幼稚園、福祉施設などでのコンサート開催が行われている。通常の練習は毎週水曜日と土曜日の夕刻に行われており、夏季、春季には合宿やサマーレーニング（集中練習）が実施される。さらに、演奏する宗教曲の理解を深めるため、月に一度、チャプレン（宗教主任）による聖書研究会が続けられている。

隊員は、一定の仮入部期間の活動を経て、聖歌隊役員会で承認されると入隊式が行われて正式の聖歌隊活動をスタートさせる。近年、男性隊員の数が急減した時期が続き、曲のレパートリーの幅が狭まるなど、聖歌隊活動について検討を余儀なくされることもあるが、現在（2024年度末）は女性隊員17名、男性隊員3名での活動を行っている。

2024年度からは、那須輝彦教授の指揮者退任に伴って、青木洋也が主たる指揮者、小林恵が副指揮者としての任にあたり、大学聖歌隊の指導を行っている。聖歌隊オルガニストは、2023年度から身崎真理子に替わって清水奏花が担当となった。那須輝彦

教授の指揮者退任時には卒業生・現役生ら約70名が集まっての感謝会が開かれ、学院創立150周年記念演奏と銘打って、新生讃美歌228番「見上げよ 主の十字架」〈Lift High the Cross〉と日本聖公会聖歌集30番「栄えあれ 神よ」がYouTubeにてオンラインリリースされている（2024年7月6日、ガウチャー記念礼拝堂にて収録）。

大学聖歌隊をサポートする外郭後援団体として2019年に「青山学院大学聖歌隊フレンズ」が卒業生らの尽力で発足した。これは聖歌隊後援会の働きをする。コロナ禍により「フレンズ」の活動は一時途絶えかけたが、現在再び活性化させる努力がなされている。